

定年・停年・諦念

黒 崎 勇

まえがき

平成14(2002)年3月31日をもって、45年間(甲南大学では42年間)お世話になった甲南学園を定年退職することとなった。たいした才能もないうえ頑固で、ものの考え方も偏った私がここまで来れたのは、それでも私を支えてくださった甲南学園教職員のおかげであると感謝している。私は、昭和63(1988)年4月の文学部教授会でドイツ文学科の廃止が決定されて以来、それまでのドイツ中世文学研究には別れをつけ、時を同じくして加藤一郎教授から受け継いだ神戸日独協会の仕事を通じて日独文化交流の仕事に集中することとなった。従って研究者としては落伍者である私であるのに、国際言語文化センター教授会はセンターの紀要に定年退職記念号の発行を決定してくださった。光栄に思う次第ではあるが、それに何か書くように仰せつかったことにはいささか戸惑いを感じた。いまさらドイツ中世文学の研究論文を書いても付け焼刃となるだけだし、国際言語文化センター紀要に相応しい内容の論文とはならない。いろいろと考えたあげく、68年の私の人生を振り返った雑文を通じて私の生きざまを見ていただくことが、少しでも甲南学園教職員の皆様を始め、友人・知人の方々の参考になればと思うにいたった。参考になれば幸甚である。

ドイツと甲南と私

人間は生まれながらにして人生が決まっているような気がすることがある。もちろん父親の職業は子供に大きく影響を与える。私の父はキリスト教の伝道者であったので直接私の職業や仕事とは関係はないように見える。しかし、一高、東大時代に内村鑑三に弟子入りしてキリスト教の信者となった父は、大学卒業後住友に入社、その後妻が亡くなったのを契機としてキリスト教の伝道を決意して先ずヨーロッパに渡り、ドイツとイギリスでプロテスタントの神学を学び、帰国後すぐ郷里山形県の鶴岡市で伝道を始めたが、同時に旧制山形高校でドイツ語と英語をも教えていたとのことである。従ってやはり少しは私の職業とも関係があるとも言える。父はアングロサクソン(もともとはゲルマン民俗のアンゲルン、ザクセン、ユッテンの総称だが、今日では英語を話すイギリスとアメリカの白人を意味する)よりもドイツ人的気質の方が好きだったようで、この点でも私は父の気質を受け継いでいるのかも知

れない。いずれにせよ、仕事の関係上父のところには色々な国から宣教師達がやって来ていたが、その際、私はドイツ人には特に興味を抱いていたようで、3才か4才のころ父から聞いてGuten Tag（今日は）とAuf Wiedersehen（さようなら）を覚えていたとのことである。もっとも、私自身は全く記憶にないが、ドイツ人が訪ねて来たときいきなりAuf Wiedersehenと言ったと伝えられている。それはともかく、何かドイツとは生まれながらにして結ばれている気がしないでもない。

一方、甲南との繋がりも面白い。父の妹の主人に江原万里と言う将来を嘱望された経済学者がいたが、若くして亡くなり、生活にこまった叔母は旧制甲南高校の寮母として働かしていただくこととなった。甲南高校の寮は神戸市の住吉（当時は住吉村）にあった。父に連れられて何度か岡本の家から甲南の寮まで歩いて行ったことは覚えている。とにかくずいぶん遠くまで歩かされた記憶がある。当時はまだJRの本山駅はなかったのかもしれない。ある時、突然「僕大きくなったら甲南高校に入る」と言いだしたとのことである。叔母は「甲南はお金持ちのお子さん達が行くところで、貧乏人の子供の行くところではないのよ」とさとされると「それでは今からお金をためる」と言ったとか。当時はお小遣いももらっていなかったと思うし、どのようにしてお金を貯めようと思ったのか全くわからないが、ともかく私のはじめて甲南高校を意識した出来事であったようだ。この叔母の後で、従兄弟の未亡人も甲南の寮母としてお世話になっており、私の家系と甲南のつながりはずいぶん古くからあった。

私が甲南高校尋常科に入学したいきさつも変わっている。第二次世界大戦中私は妹や弟と共に比較的早い時期に疎開した。疎開先は父が夏の仕事場としていた山中湖畔の家であった。ここで小学校の4年生と5年生を送ったが、山中湖には中学がなく、一番近い富士吉田の中学に通うよりは、兄も引き受けてくれていた新潟高校の化学の先生をしていた叔父のところに行って新潟中学に通う方が良からう、とのことで6年生になる直前に新潟に移った。新潟の小学校に通って、あまりにも同級生との学力の違いがあったのでびっくりしてしまった。山中湖では担任の先生は正規の教員ではなく代用教員であった。一生懸命教えてくれたのであろうが、やはりちゃんとした教育の仕方を学ぶか学ばないかの違いがあったのかもしれない。新潟の小学校で誉められたのはただ一回、工作の宿題（しかも共同制作）の提出の時だけであった。

4月に転校して4ヵ月たち、夏休みに入って間もなく、アメリカの爆撃機がやって来て「広島、長崎に次いで次は新潟に原子爆弾を投下する」と書かれたビラをまき散らして飛ばされた。その2・3日後の登校日に学校に行ったら全校生徒の内たった20名ほどしか登校していなかった。大部分の生徒達はビラが撒かれた直後に新潟市から出て行ったとのことであった。その頃、叔父は日本が無条件降伏するとの情報を得ていた。また、新潟にいても危ないので母が兄と私を引き取りにきて山中湖に戻った。昭和20（1945）年8月14日、敗戦の1日前に郷里の鶴岡に疎開していた二人の姉も山中湖に来て、兄弟全員9名が揃って終戦

を迎えた。そして9月には岡本の家に戻ってきた。

学力の点で同級生に劣っていた私であったが、父は私の弱気を気にして、当時2月に入学試験のあった甲南高校尋常科を力試しに受験するようにすすめた。私のクラスからは3名受験した。その中には成績抜群の級長もいた。その時の数学の試験はいまだに忘れられない。数学2問のうち1問はどうしても解くことが出来ないで「解答出来ません」と書いた。何とそれが正解で、何とかして解答しようとした級長が不合格で私が合格してしまった。恐らく出題ミスだと思うが、もし本当に出題ミスであれば、出題ミスが私を甲南に引き込んだことになる。担任の先生は渋い顔で、兄を教えていた別クラスの担任の方が喜んでくれ、私は複雑な気持ちであった。しかし、父にとってはもっと複雑な気持ちであったのではないかと思う。せっかく合格したのだから入学させてやりたい、しかし貧乏伝道師にとって甲南の授業料は高すぎる。それでも父は何とか工面して入学手続きをしてくれた。とにかく甲南に入るまでは、入るべくして用意された道を歩んできたとは言いがたいが、それでも甲南が私を引きつけてくれたのかも知れない。

甲南生活の始まりと挫折

大きな喜びと期待を持って始めた尋常科生活であったが、3ヵ月もしない間にバラ色は灰色に変わってしまった。まず第一に、疎開先での小学校では勉強をする習慣は身につけていなかった。そのうえ、何事も疑わずに現状を受け入れてきた私には、戦前と戦後の価値観の変化は余りにも大きすぎた。昨日までは鬼畜と言われてきたアメリカの進駐軍とそれを追いかける女性たちの戦時中には考えられない行動。戦時中は敵国語とされて、恐らく肩身の狭い思いをしてきた英語の先生たちが元気を取り戻されたのは結構なことではあるが、私には腹いせとも思われた態度にはただただ恐怖心を抱いてしまった。ある先生は、クラスの誰かがいたずらをする、連帯責任と称して、クラス全員の頭をチョーク箱のふたの角でコツン。時にはバットでお尻を叩く。後にその先生と同僚となって、ごく普通の善良な先生と認識を改めたが、まだ幼かった私には恐怖としか言いようがなかった。これですっかり英語嫌いになってしまった。姉は英語の単語の綴りを覚えない私を座らせて何度も何度も繰り返えさせたが、しょせん覚える気のない人間が覚えるわけがない。当時の甲南は、クラス45名のうち毎年何人かは落第させられていた。落第だけはしたくなかったが、勉強もせずに何とか3年生までは低空飛行で進級してきた。勉強をするより、音楽を聞いたり、歌を唄ったり、詩を作ったり、文学書や宗教関係の本を読む方が楽しかった。

3年生になった時にはとうとう限界状況に達していた。学校に行っても何一つ心を引くものもなく、しまいには学校に行く気もなくなり登校拒否がはじまった。一学期はほとんど休んでしまった。二学期も始めは休んでばかりであった。しかし、休んでばかりでは進級出来ないと気持ちを改めて休まないように努力した。この時に私の人生を変えたと言っても過言

ではない一つの出来事があった。数学の時間であった。隣の席の同級生が紙を唇の形に切って赤く塗り、必死に吸い上げようとしている。先生は黒板に書いている。そっと彼に「真ん中を切ったら行けると思うよ」とささやいた。彼は真ん中に切り口を入れて再びトライした。何と、ピッタリと唇にくっついた。見ていた回りの生徒が思わず声を立ててわらった。先生は振り向いて「静かにしろ」と怒鳴り、やおら私を見て「お前は どうせ落第すると思って同級生の勉強の邪魔をしているのだろう」と言った。この一言は私の心にグサッと突き刺さった。私は思った。「先生たる者が生徒の心を傷つけるようなことを言っても良いのだろうか。私が先生になったら、決してそのようなことを言ってはならない」と。私が教師になった切っ掛けはおそらくこの先生の一言ではないかと思う。そしてその年は先生の言われた通り落第した。その年に出来たPTAの初代会長になっていた父は落第の決定を学校で聞いて私に伝えてくれた。一言も怒らずに、やや悲しそうな顔つきで、淡々と伝えてくれた。「これから頑張れ」と言っただけであった。

ドイツ語との出会い

落第の経験は私の生活態度をがらりと変えた。やはり学校に居る限りは嫌でも学習科目の勉強は怠ってはならないことを肝に命じた。学友との交流にも努め、ハンドボール部に入部して身体の鍛錬にも励んだ。そして、何よりも学習生活に喜びを与え、必死になって勉強したのがドイツ語であった。当時は戦後の学校制度の改革に従って新制高等学校になっていたが、旧制高校の名残でドイツ語クラスがあった。私は躊躇することなくその一員となった。同学年で合計8名の生徒がドイツ語クラスで学んでいたが、私を除いて全員優秀な生徒で、8名中2名が東大に、2名が京大に、1名は阪大に、1名は京都薬大に、私とあと1名が甲南大に進んだ。ドイツ語クラスでは週に6回のドイツ語の授業と3回の英語の授業があった。高3の時には、私を除く7名が受験勉強のため英語は受けず、私一人の個人授業で当時は相当に英語の力も身に付いてきていたが、大学卒業後は英語とはとおざかってしまい、特に聞く・話す能力は残念ながらすっかりだめになってしまった。ドイツ語に関しては勉強することが楽しみで、高1の夏休みにはゲーテの「若きヴェルテルの悩み」とゲーテの詩をむさぼるように読んだ。また、ドイツリートに引かれ、特にシューベルトの歌曲は歌詞をそらんじて唄っていた。灰色の中学4年間の生活とは正反対に高校の3年間の生活は、今から振り返っても実に楽しい充実した生活であった。とりわけ、恩師のユーパーシャル先生に師事してドイツ語を究めようと決心して他大学受験をやめ、高3も受験勉強ではない勉強に集中したことは3年間の全てを意義あるものにすることが出来た原因の一つである。もっとも、甲南大学に進んだ原因の一つには、落第生であった私が高校3年間の授業料を免除していただいたことも挙げねばならない。東大時代に住友財閥から奨学金をいただいて勉学に励んだ後に卒業後住友に入社した父の気持ちと相通じるところがあるのかもしれない。

高校3年間に私にドイツ語を教えてくださいました先生は、高校3年間だけではなく大学4年間と卒業後も週に2・3回お会いして実質的な指導をいただいていたユーバーシャル先生、当時学生部長で大学が出来てからはドイツ語主任教授をしておられた村尾喜夫先生、京大卒業直後に甲南高校に赴任して来られた若手石渡均先生のほか、非常勤の先生としては、ドイツ総領事館で通訳・翻訳官もなさったことのある浪速大学（現大阪府立大学）の岩子良一教授、大阪外大の高橋周而教授と、そうそうたる先生であった。今は皆お亡くなりになってしまったが、それぞれに個性の強い先生でいまだに面影がはっきりと浮かんでくる。ドイツ語の教え方もそれぞれに違い、時には戸惑うこともあった。とりわけ、ドイツ語の発音がそれぞれに違い、それを使い分けるのに最初は気をつかった。例えば der Vater（父）をお年寄りの先生方は「デル ファートル」と発音し、若手の先生は「デア ファーター」と発音することが多かった。これをユーバーシャル先生は「ド ファト」と教えられる。ドイツ語の先生の中には「あれは行き過ぎだ」とか、「ちょっとおかしい」と批判される方もおられたが、ユーバーシャル先生が長年教えてこられた結果、日本人がドイツ人に理解されるのに一番良い発音として先生が考えられた結果である。また、ドイツ国内でも地方による発音の相違は大きい。例えば、戦後の最初の西ドイツの首相アデナウアーの発音はユーバーシャル考案の発音に非常に近い。最近では、一音節の最後の r と二音節以上の語尾の er の発音は完全に母音化した「ア」と発音する舞台俳優や音楽家が多くなっている。百年以上も前に音声学者テオドール・ジープスは「舞台発音辞典」（舞台俳優が古典劇を上演する場合の理想的発音を示す辞典）で r は必ず舌の先を震わせる発音を勧め、これを不用意に発音すると「ア」と母音化してしまうと警告していたが、今やそれが現実となってきている。いずれにせよ、ドイツには標準発音はなく、Hochlautung（高尚な発音＝辞書では標準発音と訳語をあてている）とか gehobene Aussprache（荘重な発音）といった言葉はあっても、地方による発音の相違、個人差による発音の相違は、標準発音教育が行き届いている日本では考えられない。十分に方言研究に精通した人ならドイツ人の発音を聞いて出身地方を当てることは可能である。私が最初から異なった発音をする先生方に習ったのは発音に注意を向けるのにとっても役立った。特に、日本人に発音を教える場合に、r と l, b と w, m と n の違いに注意しなければならないが、まず教員がその発音をマスターすることが必要で、その点でドイツ語の発音に注意を向けさせていただいた先生方には感謝している。

ユーバーシャル先生

私の人生はユーバーシャル先生なしには考えられないほど先生は大きな存在であった。甲南高校3年間、甲南大学4年間そしてその後も先生が亡くなるまでずっと先生に師事出来たことは誠に幸せなことであった。先生からはドイツ語を学んだだけでなく、ドイツ文学・ドイツ哲学を学び、そして何よりもドイツ精神をたたき込んでいただいた。先生は頑固で一

徹で、ご自分がこれが正しいと思われたことはあくまで貫き通された。

その先生がただ一度ご自分の人生の過ちを暗にほのめかされたことがあった。それは高校最後の授業のことである。高校を卒業し、大学に進学しても、またその後社会人になっても「決して手を汚さないように」と言われ、少し涙ぐまれた様子であった。これが甲南高校卒業を目前にしてのわれわれに対する先生のはなむけの言葉であった。正直のところ私には何を言われているのか良くわからなかった。後に先生は、私との個人的な対話で、先生がライプチヒ大学に日本学研究所を作られ初代の所長になられた時にナチを利用し、ナチの活動にも加担されたことが、後にご自分の手を汚されたと認識するに至ったことを述懐された。その後、日本学研究所が共産党員のアジトとなっているのを知りながら黙認しておられたのはせめてもの罪滅ぼしと思われたのであろう。

ある日、共産党員で日本学を学んでいた学生がユーパーシャル先生を訪ね「今にもナチの当局が日本学研究所を手入れし、先生は即刻逮捕される。いますぐに国外に退去してください」と伝えた。先生はその言葉に従って、取るものも取り敢えずオランダから再び日本に戻って来られた。先生が資産を捨てて家を離れたことは以前にも一度あった。第一次世界大戦の時、日本から青島に渡り志願兵として日本軍と戦った時である。ドイツ軍が敗れ捕虜（当時は俘虜と呼ばれていた）として再び日本に連れ戻され、習志野の俘虜収容所で何年か過ごされた後に関西に戻ってこられた。如何にも先生らしい行為であったと言える。ライプチヒ大学で、著名な法学者ランプレヒト教授のもとで明治憲法を研究し、博士号を取得するなり若干27才で日本に来られて以来、ナチに追われて再び日本に戻られるまでの先生は実に慌ただしく波瀾万丈の生活を送ってこられたが、その後は、芦屋および岡本でドイツ語・ドイツ文学の先生として甲南大学、大阪大学で教鞭を取りながら平穏な生活を過ごされた。一方ナチ当局は先生がライプチヒを離れられた2・3週間後に、先生を「ホモ行為により、日本学研究所所長の座を剥奪して国外追放とした」と発表した。また、先生に急を告げた学生は後に東ドイツ政府の要人となり、訪日して神戸を訪れた時にユーパーシャル先生との再会を希望されたが、政治には係わりたくない先生は面会を拒まれた。戦後の先生の気持ちは実に複雑であったと想像されるが、先生はあくまで自分で正しいと思われる道をすすまれた。

ユーパーシャル先生は月に1度阪神間在住のドイツの知識人と大学のドイツ関係の先生達を集めてドイツ語で話をする会合を主宰されておられた。レストラン・アラスカが発祥の場所で、後に場所を変えたが「アラスカ大学」と称していた。当時は神戸大学の教授であった加藤一郎先生や大阪大学の中村恒雄教授を始め芦田先生、岡村先生、現在も健在な中川先生、鈴木先生、片山先生、三木先生などそうそうたる教授連中であった。まだ青二才の私が列席を許されたのは例外中の例外で、「貴方はユーパーシャル先生が期待をかけている弟子なのだから頑張りなさい」と老先生方から励ましの言葉をいただいていた。中村恒雄先生からは奥様がなさっていた家庭文化講座で話をするようにお招きをいただいたり、とても親切にいただいた。これらの先生方の恩に報いることを何もできなかったのは若気の至りだ

ったのか、生意気な性格が原因なのか、今から考えれば申し訳ないことをした。「アラスカ大学」のモットーは「Freundschaft und Wahrheit (友情と真実)」で、先生は「私が死んでもこの大学は続けるように」と私に後を託されていた。しかし、現実には先生が亡くなってからは消滅し、何年か後になって、いまは亡き親友の関西大学和田賀一郎氏と「朝日大学」として再開した。毎月1回の会合はすでに360回を越えているが、「アラスカ大学」のような文化に満ちた格式のある集まりには程遠い社交の場となってしまっているのは残念で、今後何とかしなければならぬと思っている。

ドイツ留学

私が入学した当時の甲南大学は文理学部と経済学部しかなかった。ドイツ語をマスターすることが唯一の目標で、何を専攻するかは決めかねていた私は、大部分の学友と一緒に経済学部に入った。3回生になる時に文理学部に転学部したのは、ユーバーシャル教授と村尾教授から文理学部でドイツ文学を専攻するように勧められたからであった。従って、4回生になっても卒業後は大学院に進むかドイツの会社に就職するか迷っていた。その時主任教授の村尾先生から、「3年間甲南高校でドイツ語を教えながら大学の副手をしたら大学の専任教員にしても良いがどうか」と言われ、ユーバーシャル先生からは、卒業してから3年か4年ドイツに留学してみっちり勉強することを勧められた。大学院に行きたい気持ちもあったが、経済的な問題もあり、結局は両先生の勧めに従って大学卒業と同時に甲南高校で非常勤講師としてドイツ語を教え、甲南大学の副手としてドイツ留学の準備を始めた。昭和32年(1957年)4月、若干23才の春のことであった。

甲南高校では結局は2年と2ヵ月しか教えなかったが、私自身何か澁刺とした気分で活気に溢れた時期であった。先生方からは、生徒の悪戯や反抗的態度に注意するように言われ、ある先生は「俺は柔道2段で空手は3級だ、とうそぶき生徒を先ず威嚇した」と言っておられたが、私は身体が大きいのが幸いしたためか、或いは生来の鈍感さが良かったのか、生徒達にいじめられたり、嫌がらせを受けたりした記憶はない。

昭和34(1959)年にはじめてドイツ学術交流会(DAAD)の奨学生試験を受けたが、残念ながら補欠合格でその年にはドイツ留学は出来なかったが、翌年には無事合格した。もっとも、ユーバーシャル先生や当時の大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館のフリーゼ総領事の推薦があったのか、試験場に父と同郷の東大独文科正教授の相良守峯先生がおられたのが良かったのかわからないが、高校生の時からの希望がかなえられたのは本当にうれしかった。人間何が幸いするか本当にわからない。1年留学が遅れたおかげで、奨学金が月350マルクから500マルクと増額されとても助かった。留学したのは大学卒業後3年過ぎた、昭和35年の秋だが、その年の1学期は継続して甲南高校で教えさせていただくこととなった。ただ、その学期の途中で虫垂炎の手術をこじらせて腹膜炎を併発し、1ヵ月以上の入院

生活を余儀なくされ、授業も出来なくなりました。それにも係わらず、生徒たちは私の留学を祝い、募金してお饞別をくださったのは感激であった。一方、私が入院してドイツには行けなくなる、との噂が流れ、その年に補欠だった方が大喜びしたとの話もきいたが、一番安かった貨客船で行く始めの予定は変更せざるを得ず、アラスカ経由のスカンジナビア航空で行くこととなった。当時は旅費は本人が支払わなければならない、非常に高かった航空運賃を捻出してくれた両親には大変なことであったと思う。

留学先に私はミュンヘンを選んだ。当時ドイツ中世文学の権威はフライブルクのマウラー教授とミュンヘン大学のクーン教授と言われていた。私はドイツ精神を学ぶには先ずドイツ文学の歴史を知る必要があると考え、クーン教授のもとでドイツ中世文学から始めることとした。マウラー教授のもとでは高校の友人で東大の教養部を終えた平尾浩三君が学んでいた。彼は大学卒業と同時にフライブルクに行き、日本語を教えながらドイツ中世文学を学んでいた。帰国してからは、東大駒場から慶応の独文に移り、日本独文学会の会長も務めた逸材である。クーン教授は学生にとっては雲の上の存在とも言える偉い先生で、私のような青二才に構っている暇などは無いのに、研究室だけではなく自宅にもお招きいただき、私の留学目的を聞かれた。私が、出来れば学位を取りたい、と生意気なことを言っただけに対して、「私は良い人間ならば学位を取れるように育てます」と言われたあの言葉をいまだに忘れることができない。その後、クーン教授の親友で、正教授就任講演を終えられたばかりのハンス・フロム教授に紹介された。フロム教授にはとても親切にいただいた。彼の中世文学と言語学の二つのゼミに列席が許され、月に1度は自宅に招かれて美味しいワインをご馳走になった。阪神淡路大震災の時もご心配されてわざわざお見舞いの電話もいただいた。ミュンヘンに行く度に先生を訪問し、ワインをいただきながら著名なドイツ文学者の裏話もたっぷり聞かせていただいた。丁度私が図書館長をしていた時に、客員教授として甲南大学にお招きできたことで少しは恩返しが出来たのではないかと思っている。

ドイツ留学はそれまで甲南しか知らなかった甲南漬で井の中の蛙の私にとっては世界を広げる非常に大切なチャンスであった。多くの学生たちと知り合い、いろいろなグループの中で話をさせられたり、ディスカッションをしたりした。私が知り合ったドイツ人とは率直に意見の交換が出来たし、議論をすることができた。しかし、ドイツ人の中にはぶっきらぼうな人も多く、私自身も言われたことがあるが、日本から来た偉いドイツ語の先生を前に「あの先生のドイツ語は貴方よりへただ」とか「あの先生のドイツ語は良くわからない」とか平気で言っただけなので、はらはらしたこともある。ある時、著名な国立大学の法律の先生と親しいグループの中でお会いしたことがあった。グループの中に若い法律学者がいてその先生といろいろお話を試みていたが、意思の疎通が思わしくいかず、私の所に来て通訳をしてくれと頼まれた。嫌だなと思いながらもその大先生の所に行って友人の頼みを伝えると「法律用語は特別な言葉で、一般の素人には理解出来ない」と突っぱねられた。そのことを友人に話すと、「いや普通の言葉でお話したい」と言われる。プライドを傷つけられた大先生も、

すったもんだのあげく気を取り直してくれ、何とか無事にその場を切り抜けられたこともあった。私よりほんの少し年長の国立大学のドイツ語の先生から「黒崎さんは私立大学出だし大学院も行ってないから国立大学の先生にはなれないね」と言われたことがある。「大きなお世話だ」と思いながらも、日本の社会は実力本位ではなく、あくまで序列社会なのだ、と痛感した。それだけに留学から帰ってしばらくして京都大学の教養部から呼ばれた時には嬉しかった。先年亡くなられた芦津丈夫先生をベルリンにお訪ねしようと思い、お電話したところお留守で下宿先のご婦人と電話でお話ししたのがその切っ掛けだった。そのご婦人が「くろさきさんが電話してきたが、あの人はドイツ人か」と言われたとか、それ以来芦津さんは私のドイツ語に一目おいてくださっていたようで、京大でドイツ語のプラクティカルな能力のある人を採用することとなった時に私を推薦してくださったとのことであった。今日ではドイツ人顔負けのドイツ語の上手な日本人も多いが、当時はプラクティカルなドイツ語に通じている人はそれほど多くはなかった。もっとも、私の場合はプラクティカルなドイツ語能力と言うよりも、発音をマスターしたことが誉められる原因だったと思う。これもユーバーシャル先生のお蔭で、ドイツ語の発音を聞き分けることと発音を仕分けることには自信があった。それも、50歳になるまでは一番自信があったが、今では耳も遠くなり、記憶力も衰え、自信なんかはすっかりどこかへ行ってしまった。京都大学行きの話しには村尾教授が反対され、当時はまだ甲南に来ておられなかった加藤先生も京大の内情を良く知っておられ、「行かない方が君の為になると思う」と言われた。結局は、私と交換に定年の先生が甲南に移るための布石だと言う裏話もあり、私からお断りした。

私は常々「大学の先生やお医者さんの中には本当に立派な人物もいるが、私が一番嫌いなのも、私のような生意気な大学教授と医者だ」と言っている。教授も医者も一国一城の主であり、周囲の人々からは先生先生とちやほやされ、自信があり、自負心が強い。当然生意気になる。私などは自信過剰のうえ、人を許すことを知らず、とにかく我が道を貫いてきた。周囲の人々はさぞかし鼻持ちならぬ人間と思われたことと思う。自信を持ち、自分の正しいと信じる道を進むのは決して悪いことではないが、謙虚さがなければ、その良さは悪さになってしまう。今でも私は十分に謙虚さを持っているとは言えないかも知れないが、いろいろなことに遭遇してそのことに気がついた。特に、直接学生と接しながら授業を進める言語の教師は学生を温かく包んであげる包容力が必要だ。

少なくとも4年間は留学し、出来れば博士号を取得したいと意気込んでした留学であったが、結果的には1年半で帰国しなければならなかった。留学前に中谷事務局長兼理学部教授(当時は事務局長は教授が兼務していた)に私の希望を伝えた時には「更新は1年毎に下さい」と親切に教えてくださったのに、またドイツ側は私の希望を入れて奨学金の延長を認めてくれたのに、「大学は1年半しか留学を認めない、昭和35年3月末日までに帰国するように」と命じられた。出発前の中田先生の親切な助言からは考えられない命令にびっくりしたが、帰国してわかったことは、その直前に、長年アメリカに留学していた理学部の助教

授が帰国して半年もたっていないのに他大学に移ったのが原因で、1年半以上の留学は認めないことになったとか、残念なことであった。私の場合は、留学直前に助手に任命されたとはいえ、「但し、当分の間無給とする」との但し書き付きであった。それなのに拘束するのはどんなものかと文句を言いたい気持ちもあったが、出発直前に結婚、子供も出来ていたので、妻の実家にこれ以上迷惑もかけられないこともあって止むなく帰国した。

たった1年半の留学期間であったが、随分いろいろな人達と出会い、いろいろな経験を重ね、腹立たしいことも苦しいこともあったが、全体としてはとても楽しい有意義な留学であった。とにかくこの留学体験がなければ私の人生は全く別の人生になっていたであろう。今から振り返れば、ドイツとドイツ人を愛し、その文化を日本に広め、日本とドイツの交流に尽くす私の人生の基礎を作り上げた留学であった。

ドイツ文学科の設立

私が甲南大学に入学した昭和28(1953)年は大学が設立されて3年目で、すでに述べたように文理学部と経済学部の2学部があり、文理学部でドイツ文学を専攻することが出来た。ドイツ語学関係の科目はもっぱら村尾喜夫教授の下で中世ドイツ語を学んだ、これが中世文学研究を専門とするきっかけとなった。後に、村尾先生の京大時代の同級生で京大教授の石川敬三先生にも、中世ドイツ語の厳密な解説をみっちり教授いただくべく研究会にも加えていただいたことは、私にとって非常に勉強になった。一方、ドイツ文学に関しては、非常勤講師で高校時代からドイツ語を教えていただいた浪速大学教授の岩子良一先生とユーバーシャル先生であった。この年の12月に鈴木正治先生が助教授として甲南大学に赴任された。

大学を卒業した昭和32(1957)年に文理学部は文学部と理学部に独立し、文学部には国文学科、英文学科、社会学科が設置され、ドイツ語学・文学関係の諸科目は共通・関連科目として配列され、ドイツ文学専攻の学生は社会学科に所属すると言う変則的な形を取った。もともと、当時の社会学科は純粋な社会学科ではなく、哲学・地理学・歴史学・心理学等を含んだ独特の社会学科で、これらの整理に関しては当時から問題があった。ドイツ語学・ドイツ文学関係の科目とその専攻学生の立場はこの時より微妙なままで、昭和44(1969)年には文部省の教員養成課程認可の問題で、ドイツ文学専攻をなくしてしまうか、ドイツ文学科を作るかで文学部教員間でいろいろと論議した。これには上記の社会学科内の問題がからんでいたのも複雑な問題であった。当時は助教授以下は教授会の正式メンバーではなく、助教授・講師は助講会と称する会を作り若手だけ集まって問題解決のために話し合いを重ねていた。その席上である先生が「社会学科には、ドイツ文学科を作る前に解決しなければならない問題が山積している。しかし、今ドイツ文学科を認めなければドイツ語学・文学の科目も消滅してしまうし、ドイツ文学専攻も出来なくなってしまう。従って、いまは目をつぶっ

てドイツ文学科を認めるが、社会学科の問題解決の時には、場合によっては、ドイツ文学科も旗を下ろしてもらおう、と言うことでドイツ文学科を認めるより仕方ないのではないかと
言ってくださった。このような経緯があって、昭和45(1970)年にドイツ文学科が設置され
た。私はこの発言を肝に命じていた。社会学科の先生達の好意がなければドイツ文学科はど
うなっていたかわからない。もっとも、昭和39(1964)年にはビンケンシュタイン先生が、
翌年には神戸大学教授の加藤一郎先生が甲南大学に就任され、内部的にはドイツ文学科が
出来てもおかしくないほどに充実していたことも設置の理由の一つであったと思われる。特
に、加藤先生は甲南に来るからには少しでも長く勤めたいとのことで、定年前に移られ、わ
れわれ若手にはいろいろと教えられることが多かった。私は、ドイツ語・ドイツ文学に関し
ては直接先生の教えをいただいたことはないが、日独協会の活動を通じていろいろと教えを
たまわり、人生の恩師として尊敬している。

こうして、やっと独り立ちしたドイツ文学科ではあったが、そしてその頃は村尾・加藤両
教授を二本柱として関西のドイツ文学会でもその存在を十分に認められていたが、5年後の
昭和50(1975)年には両教授が定年退職、翌年にはビンケンシュタイン教授も退かれ、ドイ
ツ文学科は弱体化してしまった。特に鈴木正治教授が学長となられたことはドイツ文学科に
取っては大きなダメージであった。その間私は、昭和47(1972)年4月から翌年の3月ま
で、フンボルト研究奨学金をもらって再びミュンヘンでクーン教授とフロム教授のもとで中
世文学の研究に勤しんだ。

ミュンヘン・オリンピックの思い出

その年は丁度ミュンヘン・オリンピックが開催された年で、私は、ミュンヘンに行く前か
ら、現地採用のドイツ人と日本人の総元締としてNHKのお手伝いをする事となってい
た。そして、あの忌まわしいアラブゲリラがオリンピックを中断させてしまった。アラブゲ
リラはイスラエルの選手を人質に取って、アラブの政治犯の釈放を要求したのだ。銃撃戦の
末、アラブ、イスラエル両方に死者を出し残りのゲリラは捕らえられた。その時のドイツ国
境警備警察の処置に関してヨーロッパの新聞では、少なくとも私の読んだかぎりでは、ヒッ
トラーのナチズムを引き合いにだした記事は無かったが、日本の新聞は一斉にドイツ警察の
対処の仕方をナチと結び付けて報道した。NHKの報道関係のアナウンサーも同様であっ
た。現地採用のドイツ人達とドイツ人に親しい友人を持つ日本人達はNHKの報道関係のア
ナウンサーの対応にいきり立っていた。オリンピックは中断したままで、再開が危ぶまれて
いた。私は、日本人の自国と自国民に対しては寛大で、その侵した罪にたいする反省の意識
に乏しく、逆に他国や他国民の言動には、彼らの感情を平気で逆撫でして厳しく批判する態
度を悲しくおもった。私はユダヤ人虐殺の強制収容所を一度も見ることがない。ミュンヘン
近郊のダッハウにも強制収容所があり、日本から来た方々を案内するチャンスは何度もあっ

だが、一度も行かなかった。ユダヤ人虐殺はヒトラーの数々の蛮行のなかでも最も許しがたい行為であることは言うまでもない。しかし私は、大半のドイツ人がヒトラーのユダヤ人虐殺をドイツ人の過去の最も大きな汚点であり、彼らの中の癒されることのない傷として、心に深く刻み込んでいることを知っている。その傷口をえぐるようなことはしたくないし、出来ない。最近日本のどこかにアンネ・フランクの像が立てられたことを新聞で読んだが、ドイツ人が作るならばまだしも、なぜ日本人が作らねばならないのか、日本人の無神経さは理解できない。むしろ南京大虐殺の記念碑を作るべきではないのか。いずれにせよ、ドイツ人は第二次世界大戦後ヒトラーの犯した罪の償いには神経を尖らし出来る限りを尽くしてきた。ユダヤ人に対しては今でも卑屈と思われるほど気を使っている。当時ドイツ人は、ミュンヘン・オリンピックはそうした彼らの努力が報われ、第二次大戦の敵国および周辺諸国が新生ドイツがヒトラーのドイツではなくなったことを認めてくれたから開催出来たと思っていた。しかるに、戦争中の同盟国の日本が、自国のことは棚にあげ、新生ドイツとヒトラーとを結び付けたことは残念で仕方なかった。この思いを私は同感した。

ミュンヘン・オリンピックにはいま一つ思い出がある。中断されていたオリンピックゲームは、銃撃戦で亡くなったイスラエル選手の追悼式を行った後で再開されることとなった。ところが、開会式や閉会式と違って追悼式にはプログラムすらなかった。その時に知ったことだが、当時は開会式も閉会式も演説の内容はあらかじめテレックスで日本に送られ字幕が用意されていた。そこで、当時スポーツアナウンサーとして知れ渡っていた岡田敬三氏が私の所へ来て「一緒に放送ボックスに入り、ヘッドホーンで聞いたことを紙に書いて渡してください」と頼まれた。「はい、いいですよ」と安請け合いしたのが間違いだった。実際にやりだすと、書くのが追いつかない。考えてみれば同時通訳よりも難しいことで、それにも気付かずにお引受した自信過剰に恥じ入った。スイッチを切っている間に内容をお伝えしてその場をしのいでいただいた。本当に冷や汗ものであった。時のイスラエル駐ドイツ大使が追悼演説をしたが、私は岡田アナウンサーに名前をベン・ホリンとお伝えしたが、後で読んだ日本の新聞には全部ベン・コリンとなっていた。どちらが正しいとも、間違っているとも言えない発音の日本語表記の問題だ。

アナウンサーもプロデューサーも大学時代はスポーツの選手で、スポーツマンらしい気持ちのいい方ばかりであった。中には後に関西に来られた時にわざわざ私を訪ねてくださったプロデューサーもおられた。アナウンサーの中でいまだにNHKでお見かけするのは西田アナウンサーだけとなってしまった。出演直前に上着を宿舎に忘れてこられたのに気づいた彼に私の上着をお貸ししたこともあった。一方、報道関係の中には鼻持ちならぬほどエリート意識をひけらかしている人もいた。みな東大出身の優等生ばかりだときかされた。ここでも日本の縦社会の嫌な側面を見せつけられた。

ドイツ文学科と私

甲南大学でドイツ文学を専攻したのは私が初めてではなく、一年先輩に女性が1名いたが、大学の教員になったのは私が第1号であった。始めは教養課程のドイツ語を担当していた。当時は1クラス40名以上の大クラスで、今日の少数クラスとは程遠い状態であった。初めてドイツ文学科の科目を担当させていただいたのは昭和43(1968)年で、ドイツ文学講読を担当、翌年からはドイツ語史の担当が加わった。村尾先生が引退されたのちの昭和52(1977)年からはドイツ語学演習I・IIも担当することとなった。私は、生来の負けず嫌いもあって、村尾・加藤両先生引退後、がらっと変わってしまったドイツ文学科を他大学に負けないものにしようと一生懸命頑張った。昭和54(1979)年3月に定年を迎えることとなっていた鈴木正治先生は、退職後のドイツ文学科の将来に大変心配され、退職の1年ほど前に私宛に長文の手紙を書かれた。当時文学部では、退職される先生がおられてもすぐその後任を埋めることは出来ず、一応その専任枠をプールして、教授会でどこの学科・教室を充実させるかを決めていた。鈴木先生の手紙の内容はそれにも関連し、ドイツ文学関係の担当者が7名いるのに対しドイツ語学関係の担当者が私一人であることと、ドイツ語・ドイツ文学科関係の専任が9名いるのに対しフランス語・フランス文学関係の専任が3名(プラス1名の増員は決まっていた)で、一般教養のドイツ語を学ぶ学生数の比率から言ってもアンバランスであり、ドイツ語担当者を増やすことは認められない状況をふまえ、まず私がドイツ語学関係の科目の担当を自分一人の責任でやり抜く自信があるならばそれでも良いが、その場合は後任人事枠は他に廻さなければならない。もし自信がないか、他のドイツ語学関係の人と2名でやりたいならば、先生の後任人事枠をドイツ文学科で埋めたいが意見と決意を聞かせてほしい、と言う内容であった。私は非常に辛い立場に立たされていた。鈴木先生の後任に、私をも指導してくださるドイツ語学関係の人に来ていただければ、ドイツ文学科はより良くなったことであろう。ドイツ文学関係の先生達もそれを望んでおられたのを知っていた。また、鈴木先生も提案しておられた、若手の専任を語学関係の教員として育てなおすことも考えた。しかし、私の心の底に引っ掛かっていたのは、ドイツ文学科設立の時の文学部の先生方、特に社会学部の先生方の好意を無視してはならない、と言うことであった。プール制も文学部全体の刷新のためのもので、これを1学科の勢力温存のためにその精神を無視することは私には出来ない相談であった。結局は、鈴木先生の後任としてドイツ語学関係の先生を補充することはなかった。結果として私はドイツ語史、ドイツ語学演習、ドイツ文化特論、ドイツ文学講読等の科目の中から毎年4科目は担当し、そのうえドイツ語の授業も持つこととなってしまった。

鈴木先生が定年退職された年の9月から、3回目のドイツ留学に出掛け、1年間テュービンゲン大学とミュンヘン大学でリフレッシュした。家庭内の問題もあり、心身共に疲れはてていた私に取っては願ってもない留学であった。博士号を取得するまでは帰国しない覚悟の

うえでの留学であったが1年半で帰国せざるおえなくなった最初の留学から帰国する時に、10年に1年はドイツで生活することを密かに心に決めていた。2回目の留学は丁度10年後であったが今回は6年半後と期間が短縮された。ミュンヘン大学当時クーン教授の助手をしていたハウク氏とヴァヒンガー氏がゲルマニスティク・メッカ・テュービンゲン大学の正教授として活躍していた。言語学の権威コゼリユー教授が丁度客員教授としてテュービンゲン大学におられた時で名講義も拝聴した。また、慶応大学出身の江沢建之助氏も教官の一員として教鞭を取っておられ、私も親しくしていただいた。そのご縁で2002年3月末に、現在江沢氏が籍を置いておられるベルリン・フンボルト大学ドイツ言語学研究所、アジア・アフリカ研究所と甲南大学の国際言語文化センターとの共催で国際コロキウム「言語理論と言語教育」が行われることとなり、私の退職を飾っていただくことが出来たことを私はとても光栄に思っている。

ハウク教授・ヴァヒンガー教授は私を温かく迎え入れてくださり、早速、学期の始まる前に両教授の上級セミナーの学生とドクランデン（ドクター試験を受ける学生達）とのオーストリアへのエクスカーションに誘ってくれた。ドイツに着いた途端どっと疲れが出て寝てばかりいた私に喝を与えてくれたエクスカーションへのお誘いは大変嬉しかった。宿は毎日ユースホステル。全員が大部屋で寝る。最初の夜、私の大いびきで皆充分に寝られなかったとか、二日目からは隔離されてしまった。普段はいびきもそんなにかかない私なのに、日本で張りつめていた神経が一度に弛んでしまったのかも知れない。ひょっとすると、この留学は私の生命を長らえてくれるための留学であったのか。学期が始まり、ハウク教授からは中世末期のドイツ文学に関しての、ヴァヒンガー教授からは中世文学と音楽に関しての新しい知識をいただいた。

文学部の社会学科にはいろいろな問題があったことは既に述べた通りだが、すでに何年も前から文学科そのものが揺らぎだしていた。特に女子の憧れの的とも言えた英文学科も過去の栄光の座にあぐらをかきことが出来ない情勢であった。教員達の中で将来の文学部のありかたに関して真剣に話し合うことも多くなってきた。フランス語の先生方の中にはフランス文学科の設立を望む方もおられた。私は、母校甲南大学のしかも文学部の将来に関しては無関心でいられず、いろいろと改革案を考えていた。ドイツ文学科に関しては、私にとって一番大切なことは、ドイツ文学科と言う組織ではなく、学生にドイツ文学、ドイツ精神を教える場があることであった。ドイツの大学でも1970年代から大学改革の波が押し寄せていたが、その現状を見て日本でも近い将来大きな変革がなされる、なされねばならぬと考えていた。ドイツ文学科も教室会議を何度も行っていた。私はテュービンゲンにいても心配で会議の最中に電話したこともあった。ミュンヘンに移る1ヵ月前に教室主任に送った手紙は、私の気持ちを良く伝えているし、また、私のドイツかぶれした日本人的でない、また多くの人にはあまりにも偏っていると取られる言動を知ってもらえると思い、ここに採録させていただく。

「ご多忙の所、詳しく大学及び独文の事情をご報告いただき、ありがとうございます。チュービンゲン生活もあと1ヵ月となり、私の方もばたばたと暮らしています。独仏文化学科試案、予想通り教室内で同意が得られないとの事、貴兄に無駄な骨折りをお願いしただけに終わり、申し訳なく思っています。と同時に、私自身は非常に失望しています。考えようによっては、プロパーの独文学科で将来を押し通すのは何よりも困難なことで、全員がその覚悟で、これまで以上の努力をもって事に当たるのでなければならぬと思います。学会活動にしても、研究活動にしても、これまでのようなことでは他大学の独文科の笑い物にされかねませんし、その点で学内でも集中攻撃をあげる日も遠くないのではないかと心配です。甲南大学はぬるま湯のような所だと言われますが、その中でも独文教室がぬるま湯中のぬるま湯にならぬように注意したいものです。私がこれまでに出版してきましたいろいろな再編成案は、その根拠及び目的については今書くつもりはありませんが、このような独文科の現状を何とかしなければならぬと言う考えから作られています。しかし、現在の私は、甲南での夢も希望も全て消え失せた様な気持ちで、独文に対しても、文学部に対しても、甲南大学に対しても注意したり、意見を述べたりする気がなくなり、どうなっても良いと言ったやけっぱちな気持ちを持ちつつあります。〇〇君の後任人事にしても、私個人の意見を述べても、それが私一人だけの、独文の他の人達から浮き上がった見解でしかないのではないかと思うと、始めから、皆さんのご意見に従います、と言った方が無駄なエネルギーを使わなくて良いように思います。現に、貴兄のご報告によれば、皆の一致する意見は語学の専門家が一人ほしい、と言うことだそうですが、これに関しても、鈴木先生の在任中、先生の後任の人事枠を取る為の教室会議で私が申し上げた意見は現在も変わっていません。あの時にも私は皆さんが、何故語学の専門家がほしい、と言われるのか、その根拠についてお聞きし、私なりの資料を提出してお尋ねしましたが、誰一人として私を納得する意見は述べられず、後に、私が語学のお山の大将でいたいのだ、との陰口をしている人がいるとの噂を聞き唾然とした次第です。そして、今回も同じことが繰り返されるのをどの様に理解したらよいのか本当に迷います。

中 略

貴兄には本当にめんどろな時に主任をお願いして、さぞかしいろいろとご苦勞の多い事と思います。また、私にまで気を遣っていただいて申し訳ありません。しかし、独文教室が私の考え方、見方、方向を受け入れられない場であるならば、私は私の考え方を変えるか、その場を去るか、或いはその場に留まって沈黙するかしか仕方がないのではないかと思います。私自身は私の考え方を絶対的なものとは思っておらず、それを変えるのにやぶさかではありませんが、何故に受け入れられないのか十分に納得出来ない限りそれも出来ません。従って、当分は沈黙せざるを得ません。どうぞ、私は甲南には居ないものと考えて、事を運んでください。貴兄のご期待にそえる返事にはならず、心苦しくありますがお許しください。教室の皆様にはこの手紙を読んでいただいて結構です。皆さんによろしく。

テュービンゲンにて1980年1月26日 黒崎 勇

最低の図書館長

昭和60(1985)年10月1日に経済学部の森恒夫教授が学長に就任され、彼に請われて私は図書館長になった。しかし、図書館長としての2年間は甲南大学生生活の中でも最も不愉快な時期であった。私は、嫌なことや不愉快なことは出来るだけ早く忘れることにしているので、ここでも出来るだけ短く書かせていただくこととしたい。

問題は図書館の一部の部屋の開館時間を延長することであった。当時の図書館は職員組合活動の中心人物が大勢いた。教職員組合の時代に執行部をしたことのある私は、組合活動に関しても一応の理解は持っているつもりであったが、教員組合と職員組合が別れてからは、それぞれの組合の活動方針は当然のことながら変わってきていた。なによりも残念なのは、教職員が真剣に議論し合う場がなくなったことで、それが時としてお互いに反目し合う事態をつくり出していたことだ。各学部の教授会が、学生が少しでも長く図書館で勉強できるように、開館時間の延長を求めるのは当然のことであった。一方、図書館の職員に取っては労働時間の延長につながり、職員全般の労働強化の糸口に繋がることを恐れていた。「今でも閉館時間間際には学生の姿はちらほらしかなく、中には奥の方でいちゃついている学生もいる、時間を延長しても誰が利用するのか。学生にいちゃつきの場を与えるようなものだ」とうそぶく職員もいた。私は完全に教員と職員の間で挟み撃ちされてしまった。右を向けば教員から攻撃されるし、左を向けば職員からこつかれる。私が顔を近づければ完全に頬にパンチがあたったほど威嚇する職員もいた。別にそれに怖じ氣ついたわけではないが、私は常に弱い者の立場を理解し、助けることを大事にしてきた。また強者の奢りを忌み嫌う傾向があった。職員の中にも強い人もおれば、教員の中にも温和なひとも多いが、やはり学術研究の場では職員の方が立場上は弱いと考えるのが妥当であろう。私は職員の側に付く決心をした。そこで、私は学生自治会の代表を呼んで、事情を説明し、私の立場を理解してほしいと伝えた。当然各学部の教授会からは猛反対され、文学部の教授会でも私は厳しく批判された。勿論教員側は納得せず、私は非難されることの覚悟は出来ていた。私がおっと上手に振る舞い、ちゃんと根回しして事態の解決を図れば、こんな騒動にならなかったのかも知れない。決定的なのは、私の能力不足であった。そんな中で、日本的にその場その場の状況を判断して発言して行動するような能力を持ち合わせていないので、ドイツ文学科の中でも文学部の中でも全て単刀直入に発言し、図書館問題以外でも批判されるべきことは多くあったのではないかと思う。

ただ一つ、非常に残念で、いまだに遺憾なことがある。ある学部の教授会で私が自治会の学生を「恫喝」したと報告されたことと聞かされたことだ。その学部の図書館商議委員が私に伝えてくれた。私は「学生を恫喝するような先生は先生としての資格がない。もしそれが本当

ならば私は教員をやめる。しかし、私にはそんな覚えはないので、学部長に真偽のほどを確かめる」とその商議員の先生に反論したところ、「私に任せなさい」と言われたのでお任せすることとした。しかし、その発言をされた同僚をかばってかどうかは知らないが、その後何一つ報告がなかった。それまでは立派な温厚な先生と尊敬していた方であったが、人間性を疑ってしまった。それ以来その先生とは話しもしなくなった。

図書館長をしてる間のただ一つの心の慰みは、丁度その時期に客員教授として甲南に来ておられたミュンヘン大学のフロム教授が、ときどき若いご婦人と一緒に図書館長室に訪ねてくださり、歓談して帰られたことだった。

ドイツ文学科の廃止前後

既に述べた通り、私は、鈴木先生が引退される以前より、ドイツ文学科存続の危機を感じ、たとえ学科が消滅してもドイツ文化・文学・語学の科目は続けられることを願っていた。しかし、文学部教員の中でのドイツ文学科に対する風当たりはますます強くなってきた。昭和55(1980)年秋に第3回目のドイツ留学から帰ってきた時には、私に面と向かって「ドイツ文学科は必ずつぶすよ」と豪語される方もいた。以前は私の危惧の念に耳を傾けてくれなかったドイツ文学科の同僚もやっと気づいたのか、ドイツ文学科存続の最後の手段として、学科別入試を強く主張し、それに同調してくださった同僚もおられたが、その主張は当時の学部長にあっさりと退けられてしまった。私が図書館長を辞めた半年後の昭和63(1988)年4月20日の文学部教授会でドイツ文学科の廃止が決定され、平成1(1989)年度の入試からドイツ文学科は文学部の学科から外されてしまった。ドイツ文学科所属の教員は、最後のドイツ文学科の学生が卒業してから再び社会学科の教員となり、社会学科の新しいカリキュラムの中で該当する科目を担当することとなった。ちなみに、私はヨーロッパ文化特論、ヨーロッパ文化史と演習を担当した。

後に、「ドイツ文学科が廃止されたのは黒崎の責任だ、と先輩の先生方が言っている」と教えてくれる方々がおられた。確かに、ドイツ文学科と言う組織がなくなった責任と言うか原因は私にもあることは否定しない。しかし、ドイツ文学科の内容がなくなったのは私の責任ではないと思っている。私はあくまで形より内容を重視してきた。その考えは今でもかわらないが、もう少し形と内容の調和にも配慮すべきであったかと反省している。いずれにせよ、ドイツ文学科の廃止は私に取っても大きなショックであった。その1年ほど前から私は直腸がんに関わっていたが、原因はこの問題に絡んだストレスにあったのかも知れない。その年の8月に直腸がんを手術、11月には東西ベルリンを分けていた壁の崩壊と実にあわただしい1年であった。翌年の平成2(1990)年の秋からの国内研究は、肝心の研究こそ充分には出来なかったが、神経をすりへらした10年を反省し、手術後の弱った身体を休め、これからの活躍のエネルギーをたくわえるのに実に有り難い1年であった。特に、10月3

日にベルリンで行われた東西ドイツ統一式典に参加出来たことは生涯の良い思い出となった。手術後は人口肛門となり、その手当てでは今でもいろいろと失敗もあるが、思い切ってドイツに行ったのは、冒険ではあったが、その後の活動に対する自信にもつながった。

直腸がんの手術に関して若干述べておきたい。手術を受ける1年ほど前から直腸がんだと思いながら、私は手術はしないで寿命がくれば甘んじて受けようと覚悟していた。しかし、人生はほんのちょっとしたことで変わる。私には、風邪を引いたり、お腹をこわしたりした時にいつも見てもらう、とても親切な町医者がある。その日、何を診てもらうために行ったのかは忘れてしまったが、診察の途中でふとドクターが痔の専門家であることを思い出した。私もひょっとしたら痔かも知れないと思い、肛門の症状を伝えたところ、触診して下さり、「すぐ大病院に行きなさい」と言われた。結局は、このちょっとした閃きが私の人生を長らえさせる結果となった。人生とはこのようなものなのだろう。いささか躊躇したが、先生の言葉も無視できず、甲南病院に行って精密検査をうけた。「手術しなければならないので、すぐ入院して下さい」と医者に言われてもまだ手術の決心がつかなかった。医者は、私が特別の宗教を持っていると思われたようで、当惑された。仕方なしに、「私の友人で直腸を専門としている外科教授が東京にいるのでその友人と相談して決めたい」と申し上げたらレントゲン写真を資料として渡して下さった。早速、高校時代の親友で、埼玉医科大学付属病院の救急救命センター教授をしていた加賀美尚君を東京に訪ねた。同大学の外科部長は最初のミュンヘン留学の時に1週間に一度はお会いしていた吉武教授であった。その晩、二人にこんこんとさとされ、とうとう手術を決心した。手術当日に加賀美君がわざわざ東京から立会いに来てくれたのには感激した。執刀の先生方は何とかして肛門を残そうと努力して下さったが、再発の危険があり止むなく人口肛門とされたことを後になってから聞かされた。入院は、途中で傷口が化膿したために予定より長くなり退院まで2ヵ月近くかかった。その間、大勢の方々がお見舞いに来て下さった。夏休みに入ってから入院で、誰にも言わずに入院したのに、人の噂の広まるのは早い。東京の平尾浩三君もわざわざ来てくれた。友情の有り難さが身にしみた。〇〇先生に聞いてお見舞いにきました、と言う卒業生も何人かいた。その先生が来てくださらなかったことは別に何とも思っていなかったが、退院後お会いしても「大変だったね」とも「その後どうだ」とも、一言も私の入院にはふれられなかった。人間は実に千差万別だ。主治医の先生は最後まで<がん>にはふれられなかった。私が「がん保険に入っているので、診断書を書いていただきたい」とお願いしたら快く書いて下さった。そのお蔭で身体障害者手帳もいただき、JRの長距離運賃は半額にしていた。

ドイツ文学科を卒業した学生たちのことにも言及しておきたい。多い学年で10名前後少ない時は2名か3名、末期には0名の時もあったように記憶しているが、その大部分の学生は真面目で勉強家であった。大学で初めて学ぶ外国語をマスターしなければならないこと自体大変な努力を要するのに、皆よく頑張ってくれた。ドイツ語で痛めつけられた学友たちか

ら変人扱いされた、と言っていた学生もいた。ドイツ文学科が設立されてから最後の学生が卒業するまでの22年間に合計何名の学生がドイツ文学科で学んだか数えていないが、他の学科に比べたら圧倒的に少人数だ。その中で、卒業後ドイツで学んだ者もいるし、ドイツ人と結婚して未だにドイツで暮らしている者もいる。その割合は或いは英文科の卒業生より高いかも知れない。特に、廃止が決定された前年の入学生でドイツ文学・語学を学んだ学生は確か6名いたと思うが、良く頑張ってくれただけではなく、神戸日独協会で事務の仕事を手伝ってくれたり、大阪の花博の時に私が顧問をしていた阪急電鉄でアルバイトをして私を助けてくれた人もいた。その内3名はそこで結婚の相手を見つけ幸せな生活をしているようだ。他の1名は、私の友人のBASFジャパン大阪支店長がドイツに帰国する際に「君の学生でドイツで仕事をしたい人がいたら1名引き受けてあげよう」と言ってくれたのに応じてドイツに渡り10年仕事をした後昨年ドイツ人と結婚した。その他、日本人と結婚した人達の中で海外で活躍していた人、現在も海外生活をしている人もすくなくない。

神戸日独協会

まえがきにも述べた通り、ドイツ文学科廃止の決定以来私の活動は神戸日独協会に於ける日独文化交流の仕事が中心となった。その前年の昭和62(1987)年に、神戸日独協会が戦後再建された時から協会を支え、昭和51(1976)年からは初代会長原口忠治郎神戸市長(当時)の後を継いで第2代会長として常に協会の中心であった加藤一郎先生が老齢を理由に会長を退かれた。先生は私に会長を引き継ぐように言われたが、まだまだ若輩の私には荷が重く、まずは会長代理として、当時毎年50万円近くの赤字を出して蓄えも底をついていた協会財政の建て直しを計って会長手当てを廃止し、会長は協会のシンボルとして、実務の執行と責任は理事長が担うように機構の改革を手掛けて会則を変更した。1年後に貝原俊民兵庫県知事(当時)に会長をお願いし、私は理事長に就任した。

理事長就任当初、加藤先生の教え子で50名近くいた賛助会員が次からつぎへと協会を退会され、甲南の同僚であった理事すらも去って行かれた。加藤先生の信望がいかに大きかったか、私への人望がいかに希薄であるかを思い知らされ、まさに四面楚歌の思いであったが、それでも他の理事の方々が私を支えてくださった。中でも大阪大学ドイツ文学科出身の田中美津子理事は財務担当理事として会の財政の面倒を見てくださった。また、阪急電鉄の小林公平会長、小森幹夫専務(当時)を始め多くの方々にいろいろ支えていただいた。私は始めから財務にはタッチしないことを決めていたが、同時に催しに赤字を出した場合は自分で補う覚悟をしていた。この覚悟があったからか、幸いそれほどの赤字を出すこともなかった。とにかく会員を増強し、会の運営を軌道に乗せることが急務であった。平成元年(1989年)には日本語とドイツ語の「神戸日独協会会報」(月刊)を発行、翌年からは、特別講演を含め年間約10回の「ドイツ文化講座」を開始した。会報は2ヵ月合併号があったり阪神

大震災後の中断もあったが、2001年12月で134号に達し、ドイツ各地の独日協会にも喜ばれ、神戸日独協会の名前をドイツ中にひろめた。「ドイツ文化講座」にはのちに「日独比較文化講座」と「環境・文化・生活講座」が加わり、多方面にわたってドイツ人、日本人から興味あるお話をうかがい、今日では神戸日独協会会議室がいつも満員になるほど定着してきている。

また、年平均2回のドイツ音楽の催しも行ってきた。私にとっては出演者との交渉や準備に神経をすり減らす思いもしたが、音楽好きの方々からは喜ばれた行事である。中世音楽、古典音楽からアルプス音楽、ドイツ・シャンソン（20年代のベルリン・カバレット）、ドイツ・ジャズと幅広く、クラシック音楽では声楽、ピアノ、フルート、弦楽3重奏、管楽5重奏などいろいろな種類にまたがっている。なかでも、平成4（1992）年のヘルマン・ヘッセ没後30年を記念して行われた、私の詩の朗読と解説付きのクルト・ベーム作曲によるヘルマン・ヘッセの詩による歌曲の夕べは、戦中戦後フランスに亡命、日本に来られる少し前に南ドイツへ戻って来られたこの作曲家の本邦初演でもあり、作曲家の伴奏で歌われた作曲家の弟子で長年ドイツで活躍しておられた大前さち子さんのソプラノはヘッセファンだけではなく聴衆をヘッセの世界に引き入れてくれた。それ以上に深い感銘を与えてくれたのは、1997年1月31日のフランツ・シューベルト200回目の誕生日に催された「冬の旅」全曲のリーダーイベントであった。大阪音楽大学客員教授をお辞めになってドイツへ帰国する寸前のオッカー先生は「冬の旅」を最初の曲から最後の曲まで、休憩もせず、同じ姿勢で歌い通された。あの時の感動はいまだに忘れられない。シューベルト生誕200年とあってこの年はフィッシャー・ディスクォウを始めとして有名な声楽家が来日したが、私がNHKの放送で聞いたヘルマン・プライの冬の旅を遙にしのぐすばらしいコンサートであった。声量といい、美しい歌声といい、また歌の解釈がすばらしかった。実はその数年前に、ドイツ総領事館の文化担当官に来日直後のオッカー先生に紹介され、神戸日独協会でもコンサートをしてほしいと頼まれたが、ご高齢でもあり声が出ないのではと勝手に思い込んでコンサートも躊躇していたが、大阪音楽大学のオペラハウスで先生の歌をお聞きして、私の判断が全く間違っていたことに気づき、即座にシューベルト200回誕生日の「冬の旅」をお願いすることとした。有名な芸術家はいつも引っぱりだこで休む暇もないとのことだが、世の中には名前はさほど知られてなくとも立派な芸術活動をされている芸術家も存在することを再確認させられた。平成11（1999）年のゲーテ生誕25年には神戸日独協会もさまざまな記念行事を行った。その一つとして、「ゲーテの詩によるドイツリート夕べ」もすばらしかった。神戸日独協会の理事もお願いしている大阪音楽大学教授の永井和子先生に歌っていただいたが、先生にはそれ以前にも何度かコンサートをお願いし、協会の音楽関係の催しではいつもご助言とご援助をいただいていた。

コンサート以外では、ハンブルクの大衆劇団オーンゾルクを神戸に招き、日本で初めての上演を実現したことも忘れられない。本来はハンブルクの低地ドイツ語方言で公演するドイ

ツ中でも人気の劇団で、日本での公演は標準的ドイツ語でお願いし、字幕スーパーも用意してもらったが、はたして充分な観客を集められるか不安であった。しかし、予想に反してかなりの観客を集めることが出来た。特に大勢のドイツ人が来られ、とても感謝された。さすがに、オーソルク劇団だと思った。

神戸日独協会の仕事を引き受けた当初はいろいろと戸惑うことも多く苦勞したが、阪神大震災によって事務所と図書室が神戸国際会館もろとも崩壊した時には私は完全に氣力を失ってしまい、神戸日独協会もこれでお終いかと思った。幾人かの会員が駆けつけて図書の大部分は運び出すことが出来たが、それを保管する場所もない。将来協会を再建することができるか否かもわからぬままに、協会の重要資料、辞書辞典類、レコードは当時能瀬電鉄社長であった小森理事にお願いして駅の倉庫に保管していただき、残りの書籍は、岡山日独協会理事で岡山ヴェーホテル上野社長の好意で、ホテル内の剣道場の隅に置いていただいた。しかし、ドイツ図書室の再建のめどもなく、その後、ドイツ文学書は神戸ドイツ学院に、残りの書籍は岡山日独協会に寄贈した。理事、会員そして全国の日独協会からは心温まるお見舞いと励ましの言葉をいただいた。岡山の上野氏は震災後すぐに駆けつけてくださった。ドイツの独日協会からも続々と励ましの手紙や義援金をいただいた。中でも、ボンとベルリンの協会は会員挙げて募金活動をしてくださり、当時の円に換算すれば100万円以上の義援金をいただいた。ベルリンの義援金は神戸ドイツ学院に仮住まいしていたドイツ総領事館でDr.ハーシュ会長から直接いただいた。ドイツ人の親切には胸が締めつけられる思いで、何と少しでも神戸日独協会を再建しなければならないと心にちかった。その翌年のドイツ独日協会連合会総会には痛む足を引きずりながら参加して、震災後の経過を報告、独日協会のご好意に感謝の言葉を述べたが、途中感極まって声がつまってしまった。

神戸日独協会は事務所をてんでんと変えながら、平成11(1999)年4月末に再建となった神戸国際会館に戻ってきた。丁度、来日中であったライプツィヒのゲヴァントハウス・オーケストラのマネージャーにお願いして、有名な管楽5重奏団に新生神戸日独協会祝賀記念コンサートをしていただいた。神戸日独協会が主催したコンサートの中でも最も高く評価された格調の高いコンサートであった。その日、団員5名とマネージャーおよび指揮者ブロームシュテット氏を昼食にご招待した。団員は大阪のホテルから大型タクシーで、私はマネージャーとブロームシュテット氏とタクシーでレストランにむかった。レストランに到着直前になってマエストロがベジタリアンであることを知り、しゃぶしゃぶを用意していたのでおあわてした。レストランが何とか対応してくれてほっとしたが、コンサートと共に忘れられないエピソードとして心に残っている。この年にはワイツゼッカー前ドイツ大統領が神戸に来られ、神戸日独協会は「第2回日独交流の夕べ」として大統領夫妻歓迎クルージングを行い、ご夫妻に喜んでいただいた。

平成12(2000)年は神戸日独協会の60周年記念行事があった。目下60周年記念誌発行の準備をしているが、その段階で実は協会の発足はもっと古いことが判明した。これをどう処

理するかはまだ決まっていないが、いずれ理事会で決めることとなる。それはともかく、この年は同時にドイツにおける日本年でもあり、私は、ドイツで日本の歌を紹介することを決めて1年前からその準備を始めた。神戸日独協会と友好関係を結んでいるドレスデン、震災の年にお世話になったベルリンとボン、丁度ドイツで初めての万国博覧会が開催されていたハノーバーとヴェルツブルクで日本の歌のコンサートとそれぞれの独日協会会員との交流会（ボンは交流会のみ）を主催した。神戸日独協会会員38名が参加した。始め私が日本の歌の解説をドイツ語で行い、それから永井和子先生と武庫川女子大音楽部の畑儀文先生に歌っていただいた。伴奏は永井和子先生のご主人で元大阪音楽大学学長の永井譲先生にお願いした。各地とも好評で、特に長年現地に住んでおられる日本人は「異国で日本の歌を聞いてジーンと心に響きました」と感激していただいた。コンサート後の交流会も大いに盛り上がり、これこそ日本とドイツの草の根の交流会であった。準備には相当勢力を使ったが、それには充分報われた。これら全ての催しは、企業や行政の援助なしに行ったもので、それだけに神戸日独協会の行事として誇りをもっている。

11月には60周年記念ドイツ文化週間を開催、会員によるドイツ写真展やドイツ映画祭などを行い、最後の日に記念コンサートと式典・祝賀会を行った。東京からは Dr.ケストナー駐日ドイツ大使、樋口広太郎日独協会連合会会長にお出でいただき、貝原兵庫県知事（当時）、笹山神戸市長（当時）および Dr.プライジンガー大阪・神戸ドイツ総領事のご参加をいただき、それぞれにご祝辞をいただいた。祝賀会には300名近いご参加をいただいて盛大にお祝いすることができた。これらは、協会の理事・幹事が周到な準備をして下さったからこそ出来たことで、こうした会員に支えられている私は実に幸せ者だと実感している。一方、理事長としての13年間を振り返る時に、特に震災後の活動を振り返る時に、人口肛門をぶら下げながらどこにこれだけの事をするエネルギーがあったのか、不思議でならない。これらの活動を通じて平成4（1992）年に協会は神戸市から国際交流賞を受け、私はドイツ連邦共和国大統領から功労勲章一等功労十字章を授与された。私の生涯で、震災の翌年に在神戸ドイツ名誉領事に任命された事と共に、一番光栄な嬉しい出来事であった。もっとも名誉領事は、120年の間神戸にあった大阪・神戸ドイツ総領事館が震災のために大阪移転を余儀なくされ時に、兵庫県と神戸市に長年の友好関係に感謝の念を示すべく、またドイツ総領事館との橋渡しをする人物を置き土産として今後も友好関係が続けられるように任命されたもので、私はドイツ総領事館が再び神戸に帰ってくることを期待しながら、その時は喜んで名誉領事を返上するつもりでお受けした。本来ならば、名誉領事は大会社、大企業の会長が任命されるもので、当時ドイツ住友商事の社長をしていた実の弟すら「どんな基準で選んだのか」と訝っていたほどで、周囲の方は皆びっくりされていた。「新しい名誉領事はブルドックソースの社長ですか」といった電話もいただいた。一番びっくりしたのは私自身であった。

国際言語文化センター

教職員の間ですっかり悪評を買ってしまった図書館長を退いてからは、二度と学内の行政には携わることもないであろうと思っていたし、私自身学内では教員や職員達と顔を合わせるのも避けたいような厭世的な気持ちで日々を過ごしていた。そのうえ、ドイツ文学科廃止の決定や直腸がんの手術もあって、大学を辞めて何か別の仕事をしたいとすら考えていた。平成2(1990)年後期から平成3(1991)年後期までの国内研究期間はこうした危機的状况から立ち直るために天から与えられた賜であった。その間に東西ドイツの統一があり、ドイツ政府からは勲章をいただくにおよんで、過去の嫌なことは忘れ、前向きになって、再びドイツ語とドイツ文化の普及のために努力する気力が湧いてきた。

国内研究が終わって1年後、井上忠文学部長(当時)に呼ばれ、「目下大学執行部は外国語教育を文学部から切り離し、全学的な教育とするために言語センターの設立を考えている、その準備委員長を引き受けていただけないか」と頼まれた。もし井上教授の頼みでなかったら或いはお断りしていたかも知れない。これはただ事務的な頼みでなく、私に対する好意であることを痛く心に感じていたのでお引き受けした。教員にはいろいろなタイプがある。学内行政に熱心な先生、研究一途の先生、学生の面倒見の良い先生、何でもかんでも取り仕切る先生。本来ならばこれら全てをうまくやりこなさなければならないのだが、それには個人差もあり、仲間からの信頼も必要だし、やはり個々の先生は必然的に自分に一番合った道を進まれる。私の見る限り、井上先生はご自分の研究をととても大事にしておられる方で、学内行政に積極的に関与されるタイプではないが、与えられた業務は誠実に行う先生であった。文学部長を辞められてから他大学に移られたのは非常に残念でならない。

言文センター設立準備委員会は、各外国語の代表と各学部から選出された委員で構成され、平成4(1992)年12月に初会合を持ち、平成6(1994)年3月末に解散、4月1日から国際言語文化センター運営委員会が発足した。運営委員会の構成も準備委員会を引き継いだものとなった。当初、国際言語文化センターがどんな教育理念・どんな教育目標を掲げていたか、また当時の活動に関しては、センターの機関紙「Zephyr ゼフィール にしかぜ」に私も書かせていただいたし、何人かの方々からも寄稿いただいているので、ここでは省略させていただくが、各学部選出委員の方々の積極的関与を得て着実に言語教育改革の方向が定められていった。しかし、これまで通り文学部の教員がそれぞれの専門科目の研究・教育の片手間に外国語を教えていたのでは、新しい理念を持って新しい外国語教育を行うには不十分であり、2年後には国際言語文化センターに教授会を設置して語学教育の充実を計ることとなった。文学部からは、1年後に定年を迎えられるフランス語の山内教授と、英語教育の刷新に熱意を抱かれた枡矢教授と私が国際言語文化センター教授となり、ライクロフト先生と福島先生が2年間の年限をもって文学部から国際言語文化センターへ出向することとなった。もっとも、私には学長からも文学部長からも「国際言語文化センターへ移籍します

か」との打診もなく、「移籍してください」との依頼もないままに、当然のこととして移籍が決まっていた。そして所長を仰せつかったが、1年間だけと言うことでお受けした。本来ならば、外国語担当者として甲南大学に来られた先生方のすくなくとも3分の1はセンターに移籍していただきたかったが、残念ながら誰も移籍を望まれなかった。あの当時、私の記憶も定かではなく、教授会で決定されたのか否かはっきりしないが、語学関係の教員が退職する場合は、一応文学部と国際言語文化センターで後任人事に関して話し合うこととなっていたように記憶している。しかし、私の知らぬ間に、ドイツ語も担当していただくことで採用した教員が甲南大学を退職して他大学に移籍、後任人事は文学部で決めてしまっていた。以来、文学部ではセンター成立前の約束はすっかり忘れ去られているようだ。ドイツ文学科設立の時の助講会の約束を皆忘れてしまったのと同じであるが、これは信用問題に係わることではないだろうか。

新しいセンター教授会の所長としての最初の最も大切な仕事は、センターに与えられた英語3名、中国語1名のポストの人選であった。人事は先ず公募とすることが決められ、非常に大勢の方々が応募してこられた。また、私個人宛にも20通を越える推薦状が寄せられた。元学長、大先輩、同僚からの推薦状であった。本当に申し訳なかったが、これらの推薦状は無視させていただくこととした。心を鬼にして、と言うとおおげさかも知れないが、あくまで語学力のある、新しい言語教育に相応しい人材を選出する覚悟を決めていた。第1次の書類選考から徹底した。選考委員の中には「先生あとで困らないかな」と心配してくださる先生もおられた。後から聞いた話したが、語学力と人物を評価するための第2次面接選考の控室で、某大学の教授が「業績も実力もある私を面接する必要などないのに」と不満をぶちまけておられたとか。私の決意は大部分の選考委員に通じていたと思う。選考結果には85パーセント満足している。こうして、平成8(1996)年4月1日に、文学部よりの移籍組3名、出向2名に新採用の英語3名、中国語1名および学園法人から移籍した日本語1名の計10名で国際言語文化センターの教授会が発足した。発足当初は新任の先生方、特に英語の先生方は大変苦勞された。国際言語文化センターの新しい教育理念に沿ったカリキュラムを作るだけでも大変なのに、その方向が斬新であればあるほど、英語の授業を担当する古い教育方法に固執する先生方との軋轢は厳しく、傍で見ていると気が毒であった。はっきり言って嫌がらせとも言える言動も少なくなかった。先生方は良く耐えてくれたと思う。しかし、彼らのあげられた実績はこうした抵抗をはねのけ、今では学内でも成果を認めていただいていると確信している。

その後、英語に1名の増員が認められ、文学部の英文科から1名の移籍があり、現在は英語6名、中国語2名、ドイツ語2名、フランス語1名、日本語1名(日本語特任講師3名は目下のところ教授会のメンバーにはなっていない)の合計12名体制の教授会となった。来年度からは念願の朝鮮語に専任が着任する予定であるが、出来るだけ早い時期にフランス語の専任1名増は必要で、学長および文学部の先生方も良く考えていただきたい。また、学生

の半数を抱える中国語にあと2名の増員があれば、国際言語文化センターはますます充実して甲南大学全体の言語教育にも充分に寄与すると思う。

自然の流れのように文学部から言語文化センターに移り、初代所長となり、選挙で柘矢教授が2年間所長を引き継いでいただいたあと、一昨年・昨年と再び所長に選出され、本年度で定年退職することとなったこの6年間を振り返る時、所長の任務と神戸日独協会の仕事と在神戸ドイツ連邦共和国の務めをやりとげるのは体力的にはとても辛いものがあったが、国際言語文化センターに移って良かった、幸せであったと思っている。何よりも、教授会のメンバー全員が教育熱心で学生中心の教育に専心し、それぞれ個性的ではあるが仲間を尊重し、常にお互いに切磋琢磨しあっている。心に思うことは口に出して言い、激しく議論することはあってもお互いを尊重し信頼し合っている。理想的な教授会だと言える。私はセンターの仲間に「こんな素晴らしい教授会はどこを探してもない」と言っている。私自身心身共に疲れている時にも皆に支えられて来た。この教授会が現在の姿を持ち続け、お互いに励まし合い、理解し合ってますます良い教授会にしていっていただきたい。本年度は5年前に就任された中村耕二先生が所長になられ全員をうまく統率しておられる。国際言語文化センターも新しい時代を迎えた。皆さんのますますのご活躍と、国際言語文化センターのますますの発展を期待している。

あとがき

与えられた紙面をだいぶ超過してしまい、肝心の国際言語文化センターはすっかりはしょってしまった。ドイツ語教育の私なりの将来ビジョンも書きたかったが、これは別の機会に譲ることとした。今、書き終わって始めから読み返して見ると、まるで小学生の作文のようで公表するのも恥ずかしいが、小学生のように素直な気持ちで書き綴ったのも事実で、私の生きざまは読み取っていただけのではないかと思う。始めは「68年の人生を振り返って」と題して書き出したが、読み返してみると、私の人生の年月はなにか始めから定まっていたような気がするし、その年月もいずれ停止する時がくるであろう。平成14(2002)年3月31日はまさに甲南学園専任教員を停止する時である。4月1日からの生活はその時になってから考えるつもりでいるが、いずれ諦念しなければならない日も近いことを予感し、「定年・停年・諦念」と題した。